基腐病に強い原料用サツマイモ品種「みちしずく」の苗生産技術

種イモサイズを100～400gとすることで，多くの種イモ個数を確保，伏せ込み間隔20×20cmで，多くの採苗本数を確保できる

背景・目的

- サツマイモ基腐病の対策として抵抗性品種の早急な普及が必要
- 種イモ基準サイズは200～300gであるが，「みちしずく」は種イモ栽培で200g以下のいもが多い特性を持つ
- 「みちしずく」の栽培面積拡大，苗確保にむけて，育苗技術の確立が必要

成果の内容

- 種イモサイズを100～400gにすると，基準サイズ（200～300g）のみに比べ，使用可能ないも個数が4～5倍となる（図1）
- 100g～200gのサイズが小さい種イモは採苗本数が少ないが，苗質は基準サイズと同等
- 種イモ100g～400gまでを混合した育苗は，基準サイズのみに比べ，採苗本数は1割程度減少するため，育苗床面積がやや広くなる
- 種イモの伏せ込み間隔は，20cm×20cm間隔が適する（図2）

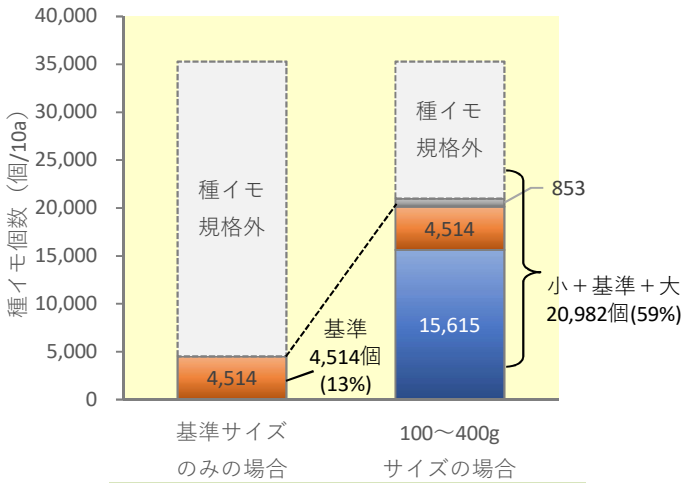

図１　サイズ別種イモ個数と個数割合

注）（　）は，いも個数割合

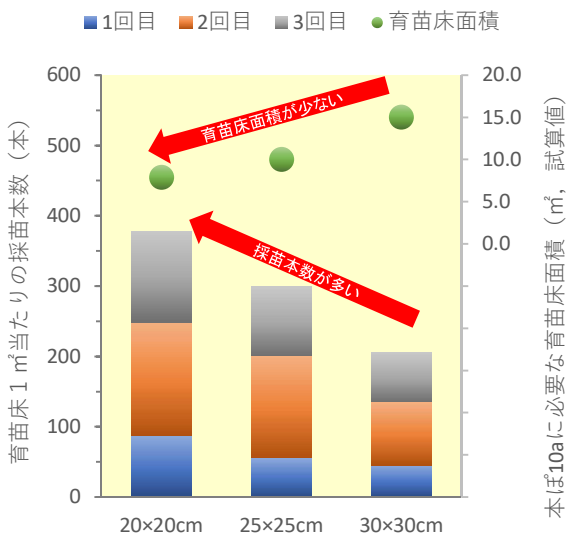

図２　伏せ込み間隔別採苗本数と育苗床面積

期待される効果

○種イモサイズを100～400gとすることで，使用できる種イモ個数，育苗面積が増加し，多くの苗を確保可能

○種イモの伏せ込み間隔20cm×20cmで，良質苗の採苗本数が増加

抵抗性品種「みちしずく」の普及により，基腐病の被害が軽減

サツマイモの生産安定

○普及対象・範囲
県内原料用サツマイモ生産者

鹿児島県農業開発総合センター
大隅支場園芸作物研究室

（R05）